

## 編 集 後 記

ここ数年、消化器外科関連の発行部数の多い英文雑誌（Am J Surg, Ann Surg, Ann Surg Oncol, Arch Surg, Brit J Surg, Cancer, Dis Colon Rectum, Hepatology, Surgery, World J Surg, など）に日本からの論文が掲載される頻度が高くなってきている。1雑誌に3～4編掲載されていることもある。また、その内容は基礎的な研究のみでなく、臨床例を分析した論文も増えてきている。この要因を考えてみるに、確かにそれ以前にもコンセプトとしては立派な研究が多く行われてきていたが、論理的な展開や科学的根拠の点に関して欧米人を納得させるのに不十分な点があったのではないかと思う。1980年半ば以降、多くの若手外科医が欧米に出かけ、欧米流の論理展開や思考過程を十分に理解して帰国するようになったとともに、欧米人、欧米の文化、英語に関しても憶することなく対等に付き合えるようになったことも大きな要因と考える。臨床論文においては、以前は投稿しないないしは採用されない根拠を、症例数が少ないことや日本の独自性のため欧米には理解できない、としていたが、それは誤りであり、現在では少ない症例数でも論理の展開がしっかりしており、公平に結論が導かれ、考察も十分に行われていれば採用されることが明らかになった。

我々消化器外科学会雑誌の編集委員は投稿論文に対しては時間をかけて査読し、よりよい論文にしたいと心がけている。しかし、結論が先にあり、それに沿うような論理の展開のみを行ったり、自分たちの結論に沿うような考察のみを行ったり、また、感覚や経験を重視した論理展開の臨床論文がまだまだ多く見られる。診断法や治療法を評価する場合、一歩下がって枠の外から全体を見つめなおし、公平に判断することが重要と考える。編集委員の指摘やコメントは投稿論文を医学的、論理的によりよくする目的で行われるものであり、投稿者はそれに従って論文を丁寧に直して、再投稿していただきたい。

（杉原健一）